

### 第3回「美術と教育を考える会」シンポジウム

日 時：平成26年1月26日（日） 午後3時～5時30分

場 所：中央区立泰明小学校 講堂

テーマ：「美術と教育を考える」～美術を通じたコミュニケーションについて～

登壇者（敬称略、五十音順）

上野行一（帝京科学大学こども学部児童教育学科教授）

高村弘志（中央区立泰明小学校主任教諭）

近藤誠一（前文化庁長官）

茂木健一郎（脳科学者）

山本豊津（東京画廊＋BTAP代表）

司 会：野呂洋子（銀座柳画廊副社長）

野呂：本日はお忙しい中、またお寒い中を、第3回「美術と教育を考える」シンポジウムにお集まりいただきましてありがとうございます。私は本日司会をさせていただきます銀座柳画廊の野呂洋子と申します。はじめに泰明小学校校長の和田利次先生よりご挨拶をいただきたいと思っております。

和田：泰明小学校の和田です。本日は第3回「美術と教育を考える会」の開催、誠にありがとうございます。また、本校にお越しいただきましてありがとうございます。私は昨年の7月に初めてこちらの「美術と教育を考える会」に参加させていただきました。その時は色々難しいお話などもございましたが、基本的には子どもたちは美術を通して様々な体験をすることにより成長することが関係者の皆様の議論から伺えました。今回のテーマは美術を通じたコミュニケーションということですが、こうしたことを通じて豊かな教育環境を子どもたちに提供できることは、本校としましても非常にありがたく感じております。また、こうした積み重ねにより、子どもたちが美しいものを美しいと感じる、自分が美しいと感じたものを人に伝えるといった、豊かな感性を子どもたちが身につけることは、成長過程において非常に重要であるとともに、美術教育の重要性を改めて感じている次第です。本日は分科会を設けると言うことで、それぞれの立場の方が意見を交換することにより、さらなる議論が深まることを期待しています。またシンポジウムにおきましては、各分野の専門家の先生方にご参加いただきまして多方面からのご意見を頂戴することにより、美術と教育の重要性について、多くの示唆が得られるものと期待しております。またご参加の皆様におかれましては、帰りに銀座の街を楽しんで帰っていただければと思っております。以上を持ちまして、私のご挨拶とさせていただきます。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

野呂：ありがとうございました。本日は文部科学大臣の下村博文さまより祝電をいただいておりますので、こちらで紹介させていただきます。

「この度は、第3回『美術と教育を考える会』シンポジウムのご開催、誠にありがとうございます。感性や創造性を育てる美術を通し、豊かなコミュニケーション能力と活力にあふれたこども

たちを世に送り出すため、たゆまぬ努力を続けてこられた皆さまに心より敬意を表します。今後も人格形成に資する情操教育の発展に尚一層のご尽力を賜りますようお願い申し上げますとともに、各界を牽引する専門家の皆様の活発な意見交換により異議深いシンポジウムとされますよう祈念し、お祝いの言葉といたします。 文部科学大臣 下村博文

ということでございます。また、私の方からは、「美術と教育を考える会」の趣旨についてご説明させていただきます。

私たち銀座ギャラリーズでは、美術の教育に携わる現場の先生方を応援する意味を含めまして、このシンポジウムを開催してまいりましたが、このシンポジウムも今回で3回目となり、そろそろ次の方向性を示さなければいけないと感じています。

私たち美術商は、美術が与えてくれる豊かさや、芸術家の思いを多くの方に伝える事によって経済活動をしており、芸術家の生活を支えることが使命であると思っています。しかし、まだまだ日本社会では美術品は特別なものであり、一部のお金持ちの方の贅沢品であるという社会通念が一般的なものだと思っています。

「美術と教育を考える会」は、この社会通念を改めたく、日本社会の生活の中に密着した芸術を推進するために、学校教育における美術と教育の意味、生涯学習における美術と教育の意味を考えていきたいと思っています。そのためには、美術と教育に関係する多くの団体とのコラボレーションも図っていきたいと考えています。

現在の日本の学校教育においては、英語や数学を優先させて、美術は授業数を減らすか選択制にするか、場合によってはいらぬのではないかと声すらあります。グローバル化の波は、教育現場に大いにゆさぶりをかけています。しかし、いくら英語が話せても、日本の美術も知らず、日本の歴史も語れない日本人が海外で活躍できるはずがないのは誰の目からみても明らかです。そのため、次回からは「学校教育に本当に美術は必要なのか？」と思っている方にも会場に来ていただき、ご意見を伺いたいと考えています。

いつの日か、日本社会が変わったな、日本は本当に文化大国になったな、と実感できる日を目指して、皆さまとともにこの会を発展させていきたいと考えています。これからも、皆さまのご参加、ご協力を期待しております。どうぞ、よろしく願いいたします。

それでは次に 本日の進行について 会の発起人の一人でもあります上野行一先生にご挨拶をお願いいたします。

上野：美術と教育を考える会の幹事をしております上野でございます。この会は美術教育の現状を訴えて、今後のよりよい美術教育、そして美術と教育の在り方を考えていく会にしていきたいと思っています。またそのためのアクションを取っていく、そういう狙いを持った会にしていきたいと考えています。今回は3回目の会でございますが、1回目は「美術とクリエイティビティ」、

2回目が「美術と感性」そして今回の3回目は「美術とコミュニケーション」とテーマを持って開催してまいりました。今回もお二人のゲストスピーカーに来ていただきました。お一人は前文化庁長官の近藤誠一さん。近藤さんには1回目から全ての会に参加していただいております。さらに、近藤さんには我々の会の顧問になっていただくということで、私たちの内側の人間になっていただくことになりました。もうひと方は脳科学者の茂木健一郎先生です。茂木先生は美術に非常に造詣の深い方で、大学で授業もされていらっしゃるし、美術の著書もごぞいます。茂木先生の著書の中に、「モナリザに並んだ少年」というのがごぞいます。私の著書にも「モナリザは怒っている」というのがあるのですが、茂木さんの本の方が良く売れているという話です。私も頑張ろうと思っている次第です。

さて、今回は「美術とコミュニケーション」というお題ですので、この後、茂木先生の基調講演をいただいた後に、全員参加のワークショップを予定しています。ワークショップについては、また後ほどご説明いたしますが、皆さま一人一人がこのシンポジウムに参加して発言できるようにということで企画いたしました。そのワークショップで皆さま方からいただいたアイデアなどをもとにして、引き続きシンポジウムをいたします。シンポジウムの前に皆さまの方から、忌憚のないご意見をいただければと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

野呂：それでは早速ですが、基調講演ということで、茂木健一郎先生よりお話を頂戴したいと思います。茂木先生、どうぞよろしく願いいたします。

茂木：10分くらいということですので、手短かにお話させていただきます。まず、細かいことは省略させていただいて、美術教育というのは当然、重要なものであります。感性というものは、人間の全ての学びや仕事に関わる重要なものなんですね。例えば、この iPhone というアップルの製品ですけれども、このような商品を日本企業が作れることが日本の成長戦略に直接関わることになるわけです。このような製品を作るためには、デザイン力ですとか、美しさですとか、人の感性に訴えることが非常に重要になってくるわけです。しかし皆さん学校の教育現場において、美術の授業ということになると、実際にはとても心もとない思いをしていらっしゃると思うのです。美術の授業というのは、人間性を育むとか、人間の感性を育むといった意味から外れたとしても、今からグローバル社会へ向けて英語という科目が非常に科目であると認識されているのと同じように、美術教育というものは英語と同じくらい重要な科目であると私は考えています。先ほど野呂さんがおっしゃいましたが、もともと日本という国は、「美」というものに大変感度が高い国であるわけで、それは書画・骨董というものもそうですし、あるいは、先日文化遺産に登録された和食などもそうですよね。今、世界の人々が日本人の感性に非常に注目している時代だと思うんです。それは、漫画とかアニメといったものも含めてですよね。その中で、足元の日本の子どもたちがその大切な感性というもの、この感性というのは、国際競争力を考えていくうえにおいてもっとも重要な要素のひとつだと思うのです。なぜ、私がこのようなお話をしているかというと、この感性というものが機能しないと、今の世の中では通用しないと思っているからです。つまり、今の時代において子どもたちに「美しいものを理解する心を育みましょう」なんてことを言ったところで、お国の方々の言うことを聞いてくれない時代になっています。僕は今いったような形で提案していくことは必要不可欠であると考えています。つまり、日本の車にして

も電化製品にしても、あるいは服飾業界といったものにしても、全ての製造業においてデザイン力というのは欠かせない視点なので、それらの基礎体力をつけるためにも日本の美術教育は非常に重要な要素だと思っています。それでですね、そういった視点からみて、あえて日本の美術教育に欠けているものがあるとするならば、それは批評性だと思っています。私は、東京ステーションギャラリーでやっている「プライベート・ユートピア ここだけの場所—ブリティッシュ・カウンシル・コレクションにみる英国美術の現在」を観に行ってきました。イギリスの現代作家の紹介をしており、昨日行ってきました。そうしたら、そこに20分くらいのビデオ作品があって、かなりびっくりしたんです。なんだかわからなけれど、これはすごいな~と思ったんです。そうしたら、その作品はイギリスの現代美術の最高の荣誉であるターナー賞の2012年の受賞作品だったんです。それって僕に審美眼があるってことですよ。だって、これすごい作品だな~と思ったら、ターナー賞受賞作品だったんですから。ネタバレになりますから内容はお伝えしませんが、ぜひ、東京ステーションの展覧会に皆さんも行ってその20分の作品を見てください。しかしですね、東京ステーションギャラリーに人が入っていないんですよ。その東京ステーションギャラリーの近くに三菱東京一号館美術館というのがあるのです。その美術館では開館当時からずっと印象派の展覧会をやっているんですね、僕も印象派が好きだからいいんですけど、そこにはおばさま方がたくさんいらっやっています。

僕が言いたいのは、日本の美術は明治で止まっているということなのです。図画工作という言い方もそうなんですけれど、でも現代の美術というのは先に進んでいて、そこでは批評性とは何かを批判するものではなくて、新しい物の見方をするということですね。実は美術において最も重要な点であると国際的に指摘されていることは、日本の美術界は明治で止まっているということです。僕が7年間教えていた東京芸術大学というところは、ある作家にいわせると、日本に残った最後の明治だというわけです。まあ日本画・洋画というカテゴリー分けを含めてですね。また昨年度、日展という公募展が批判されましたけれど、僕は公募展は必要だと思うのですよ。ただ日本の美術界全体が、今申し上げたような時代の進歩とともに美術を取り囲む環境が変わってきているわけですから、やはりそれに合わせて前進しなければいけないと思っています。それをしなければ小・中学校においても、美術教育が必要であるという説得力をもつことは難しいのではないのでしょうか？ ですからターナー賞に表れているように、現代美術というのは現代の問題に取り組んでいるのです。今の日本の子どもたちもそうです。子どもというのはとても敏感です。僕は良く覚えていますけれど、僕が小学生のとき、環境問題などは今の中国のような状況でしたので、よく光化学スモッグなどがありました。環境について絵を描いたらとても真剣に描いていたと思います。一方で未来都市の絵なども描いたりして、空中に車が飛んでいるような絵を描いたりしていたのです。子どもたちの夢とか、現代社会に対する問題意識とか、そういう意識は美術において最も強く表現されるのだと思っています。もちろん、それが全てではないですよ。全てではないのですが、静物画とかデッサンをしたりとか、立体作品を作ったりとか、伝統的な美術表現も必要だとは思いますが、子どもたちは世の中のいろんなことを感じているのだと思うのです。エネルギー問題、環境問題、またこれから東京オリンピックが来ますでしょう。そうすると世界の人とどういふふうコミュニケーションするんだろうとか、この後にワークショップがありますから、それをテーマにしていると思うのですが、そのようなことを今の子どもたちは世界の中で感じているのでしょから、それを感性において捉え、そして一番大事なこと、

美術の世界においては正解がない、ということですよ。相変わらず日本の入試は偏差値入試をやっていますけれど、しかしある美大の入学式で学長がこんなことを言ったのだそうです。「よろこぼ、偏差値のない世界へ！」考えてみれば、美術には偏差値がないわけですよ。「私はこれが好き」「彼はこれが好き」という具合に、絶対的な基準なんてものはないわけですから、人というのは違うものが好きなんだ、人によって見えているものが違うんだ、ということを経験上でも、僕は美術において「正解のない世界がある」ということ、現代的な美術につながる批評性、つまりは現実を新しい視点からみるということを経験上でも子どもたちにわからせたい。高齢化問題とか介護の問題だとか、そういう問題にだって子どもたちは敏感になっていて、あるいは「いじめ」の問題ですとか、あるいは金銭的な問題で教育を受けられない子ども達がいるということも、わかっているのです。また日本から転ずれば、内戦があって、子ども達が傷ついていて、というような問題に実は子ども達は非常に敏感で、そうすることについても、未来につながる前向きな形で美術教育が行われるようになった時に、本当の意味で美術教育というのは必要なものと認められる社会的な合意やコンセンサスができるのではないかなと思っています。色々勝手なことを申し上げましたがワークショップを楽しみましょう。どうもありがとうございました。

野呂：茂木先生、素晴らしいタイムキーピングと、素晴らしい内容のスピーチをありがとうございました。それではこれからワークショップにうつりたいと思います。

(ワークショップおよびワークショップの発表については省略します)

(また、シンポジウムにつきましても音声入力が途中からになってしまった関係で冒頭部分が省略されています。誠に申し訳ございません)

シンポジウムの途中より：

高村：子どもたちはしょうがないから考えているのだと思います。僕の公開授業を見に来た先生方は、よく「どうして子どもたちは、先生に聞きに来ないのですか？」と質問を受けるのですが、子どもは僕のところに聞きにきたくないのでしょうか。僕は子どもに嘘ばかり教えますから。それで、子ども達からは「先生、なぜ嘘をつくのですか？」といわれるのですが、「いや、僕は君たちに嘘をついたことはあってもだましたことはない」と言っています。つまり、子どもたちのわかる範囲での楽しい嘘はついていきますし、子どもたちはするどいので騙されません。そんなこんなで毎日、子どもたちと遊んでいます。僕は子どもたちを1年から6年までみております。高学年になると、子どもたちの関心事は、先生がどうやってABCの成績をつけているのかということです。そんな時は、君はここにいて、君はここにいて、君はここにいるんだよ、と教えます。子どもたちを比べているのではないのです。そして、皆、同じではダメなのです。子どもたちは成績表を友達同士で見せ合いますからね。そうすると、子どもは「なぜ、こいつは図工でAがついていて、俺はAじゃないんだ。」ということに意識が集中します。そして、僕のところにきて「何で僕の図工の成績はBなんですか？」とくるわけです。それは、簡単に言ってしまうと、先生が言ったことしか描いていないからなんです。要するに、こういう絵を描いてみようね。というと、それしかやらない。でもAがついている子は先生が言ったことを乗り越えて、他のことをやっている。並べてみるとわかるのです。でも、それをやると生徒は「ほら、先生だって比べているじ

やないか」と反論するわけです。ですから、そうじゃないんだ、と伝えますが、そのあたりの加減が難しいと感じています。

山本：ありがとうございました。僕は初めてこのワークショップを経験しました。ひとつのテーブルに6人から7人集まり、まず自分たちの自己紹介をしました。すると、自分たちの職業を超えた場が生まれる。あ、この人は校長先生だな、この人は学芸員だな、と。初めはその方の職業を意識しますが、コミュニケーションを重ねると、場のようなものができます。発言された先生方のお話を伺うと、大切なのは「場」の作り方だと思いました。前々から高村先生はコミュニケーションが発生する場の作り方がうまいと思っていました。それからこの会も泰明小学校に場を提供していただいているから、様々な分野で活躍している方々を招くことができます。商談後に食事ができる銀座はコミュニケーションをスムーズに成立させる場として役立っています。古代の人々の絵が残されているアルタミラの洞窟も、必ず人が集まる所ですよ。しかし今、日本の社会では「場」の作り方がうまくいっていないように感じます。その「場」について、ちょっと茂木先生、ご意見をいただけますでしょうか？

茂木：え？「場」についてですか？ はい。今、海外の教育学習に携わって感じるのは、主要教科に対する批判のひとつは点数化してしまうということですよ。そしてもうひとつは個人競技で行われているということです。しかし今の時代は、コラボレーションの時代といわれていますよね。ですから、ひとりの子の国語、数学、理科、社会の点数が何点かということは、全く意味がないのです。むしろ、国語が得意な子と数学が得意な子がコラボすればいいじゃないかということです。マサチューセッツ工科大学（MIT）に新しい組織ができたのですが、その組織が「サイエンス」という雑誌に論文を発表しまして、そこにはチームを組んだ時の相関関係についての色々な指標が出ていました。例えば、チームの中で一番能力の高い人と相関があるのではないかとか、そのチームの平均値と相関があるのではないかとか。色々な仮説を立ててパフォーマンスとの相関を調べてみますと、そのチームの最も能力の高い人とも関係がなく、平均的な能力とも関係がなかった。何と関係があったかということ、ソーシャル・センシティビティ（社会的感受性）と相関があったと書いてあるのです。つまりお互いに相手を感じていることを組み取る能力が高いことがチームのパフォーマンスと関係していて、特に会議の場においては、誰かが一方的に話をしている状態ではなく、我々の言葉で言うとターン・テイキングというのですが、リーダーにソーシャル・センシティビティがあると、チームのパフォーマンスが上がるということです。なぜ、MIT がこういうことを研究するようになったかということ、今は SNS も含めて人々がコラボレーションをする機会が非常に増えてきていて、これから非常に大事なことになってきているからです。日本の教育の課題は色々あるのですが、ひとつは、相変わらず日本の教育はペーパーテストの個人競技でやっているということで、これからの文明や社会から要請されているコラボレーション能力とは違うのです。つまり、日本で優秀とされる子どもはペーパーテストは得意かもしれないけれど、コラボレーションはあまり得意ではないわけです。それでは日本の競争力は高まらないのです。例えばですね、美術作品においても、一人ひとりに美術作品を描かせるのもいいのですが、この泰明小学校で実施されているような、下の講堂にあった「巨大なくじら」をチームワークで作らせるという作業が非常に有効な教育になってくるわけです。ああいったことを、

美術教育で「場」として作ることができるか、ということが重要なのではないかと考えています。

山本：ありがとうございます。その「場」について 近藤誠一先生から何か、メッセージをいただけますでしょうか？ これから日本人は「場」の作り方を重視しなければならなくなります。日韓問題や日中問題についても我々日本人が海外に「場」を作って発言していくことが求められる時代だと思うのです。近藤先生、よろしく願いいたします。

近藤：それぞれの組織には、個人の立場とちがった「組織の論理」があり、例えば、かつて私のいた役所では組織として国の利益を背負っていました。各組織はそうした論理をベースにした「場」を作っていくわけですから難しいですよ。自分個人の気持ちとして言いたいことがあったとしても、自分が属するオフィシャルな立場で異なることを発言していくということは現実的にはできないのです。ですから組織の理論が対立するときどうするかというと、プライベートに人間関係をつくり、個人的に親しくなり、その中で個人的な意見として意見交換をすることで、オフィシャルな場所にておいて相手の気持ちを探り合い、それをオフィシャルな交渉に反映させていくということをするのです。まあ、それにより歩みよることは不可能なことではないと思っています。相手の歴史や文化、時代背景なども勉強して理解した上で、現場レベルでは様々な情報交換をし、意見交換をしながらお互いの仲間をどれだけ作るかということだと思います。そうやって、さまざまなレベルにおいて公式・非公式な「場」や「空気」をどれだけ作っていくことができるのかということが重要であると考えています。

また余談になりますが、日本人のコミュニケーション能力という点で、最近 TV で面白い番組を見ました。「ポジティブ心理学」というテーマで、米国人の心理学者が幸せ感について話している中で、米国人は個人主義で自分を社会に投げかけていって自分の都合のよい状況をつくらうとするのに対し、日本人は集団主義なので、周囲の状況を分析し、それを自分の中に取り込んで、他の迷惑にならぬよう行動するというのです。そのためどうしても日本は自分を抑えようとするので、幸せを感じがたいと言っていました。これをコミュニケーションに置き換えれば、日本人は周囲のこと、空気はしっかり読み取るけれど、自分の考えを外に説明し、議論しながら合意点を得るという意味のコミュニケーション能力は当然低くなるのではないのでしょうか。これが日本人はコミュニケーション下手といわれる所以でしょう。その意味で美術や芸術一般は、あまり周りを気にせずに自分を表現するチャンスを与えてくれるという意味で、こういう国際的にみた日本人の欠点を補えるのではないかと思います。

山本：ありがとうございます。社会がグローバル化へ向かうなかで、日本人は改めて自身の特徴を認識しなければならないと痛感しました。世界の現代美術動向は、茂木先生がおっしゃっていたコラボレーションの方向へ向かっていて、アーティスト同志からさらにアートが生物学とか物理学とか他の学問に密接に繋がる表現をする方向になると予想しています。2階の講堂にあった「クジラさん」、すばらしかったです。あれは生徒がみんなで作ったと伺いました。「カメさん」もそうだし。そして、あの中でワークショップをしたことが最高の「場」づくりだった。高村先生の「場」づくりは素晴らしいものだと感じました。

そろそろ、時間がなくなってきましたが、近藤先生と茂木先生のお話を参考にすると、子どもは、

歴史や社会に対する教養はまだ勉強していないわけですが、我々大人は、教養や知識といった、それぞれの人生体験の蓄積などによって、多分「場」の在り方が、世代や環境によって違ってくるのだと思います。これから世界の中でコミュニケーションをとるためには「場」が欠かせませんが、子どもの時ほど「場」が作り易いだろうと今回のワークショップでも感じました。ですから、子どもの時から色々な人と接して、「場」の作り方を学ぶことが、これからの教育に必要なのではないかと今回のワークショップを通じて学びました。また、我々の活動においても「場」を作ることの重要性を学びながら、すでに画廊も「場」を作っているわけですし、美術館もそうです。どうしても「場」には属性があるわけで、その属性を超える「場」の作り方のようなものを今回、上野先生に教えていただいたワークショップを経験することで、参考になったと思っています。最後に上野先生お願いします。今日のワークショップを通してアートはコミュニケーションのための「場」と成り得ることを改めて確信しました。

上野：はい。ありがとうございます。先ほど、近藤先生がおっしゃったように、別々のバックグラウンドを持った人たちがフラットに話し合うのは大変だということですね。今日だってそうですよね。前文化庁長官や世界的な脳科学者が椅子を並べて普通にしゃべっていたわけですよね。こういう「場」というのは普通ないのですよ。ですが、こういう「場」が必要ではないですか？ そのためにも色々なところで発言していきたいですし、色々なところに働きかけていきたいですよね。学校関係でいえば、小学校や中学校の先生方は学校の中でしか話が進まない。美術館は美術館の中だけでしか話を進めていないのです。そこで固定化された美術に対する考え方とか、あるいは授業に対する考え方というのがあって、小学校の先生と中学校の先生が会ってたまにお話をしたりすると、何を考えているんだとお互いに意見が合わなくなってしまうというのはよくあることなんです。それで、それを少しでも良くしようと思って作ったのが「美術による学び研究会」という会です。幼稚園から小・中・高等学校から大学まで全ての学校の先生方に入っていて意見交換をする「場」を作っています。色々な方から意見をいただくことがとても大切だと思いました。また先程、茂木先生からこれからの美術教育において重要な指摘がありましたね。これからの授業の在り方に繋がっていくと思うのですが、みんなでひとつの「場」を共有するような美術表現をするということです。確かに一人の作家が自分の中にあるものを表現するというやり方もありましたが、そもそも美術というものの意味合いというのは、時代によってどんどん変わってきているのではないですか。写真の代わりであった時代もあるし、文字を知らない人たちのための文字の代わりだった時代もあるし、今言ったように特定の個人の内面を露わにする美術もあるわけです。しかし、今日の時代の美術は何かと問われれば、そこにはないわけです。そこを超えていかないと美術の意味はないのです。例えば茂木先生がおっしゃっていたような現代の社会問題を批評していく「場」という意味もあるでしょうし、それも一人ではなくて共同してやっていくことが流れになっていくでしょうから、学校の教育の現場でもそうしたことをどんどん取り入れていくことが求められていくであろうと感じました。

ひとつの事例ですが、ある荒れた学校でこんな授業をした人がいました。石を磨く授業です。ひたすら石を磨いて球にしていくのです。そうすると暴れん坊の中学生が、他の授業は来ないのに「先生、続きやるぞ！」とその美術の時間だけちゃんと授業に来たそうです。生徒が「磨かせてくれ」というから、どんどん磨かせて、磨き終わったら帰っちゃうんですね。これもまた、集中



してやっていくとハイになっていくということだと思うのです。それはそれでいいのです。ただそれを授業としてやっていくのは非常に難しく、教材としてそれがどんな学校でも成り立つかというとまだまだ問題があると思います。ただ、その石を磨くという行為が授業として成立することもあるということを多くの方に理解していただいて、サポートしていかなければいけないと思っています。また、私が昨年11月にある幼稚園で、馬を見てきた幼稚園児が園に帰って描いた絵を見学したのですが、園児によって描く順番が全然違います。皆さん、どこから描きます？ 頭から描く子もいれば足から描く子もいましたが、園児は自分が一番描きたいところから描き始めるのです。つまり、強く自分が感じたところから描いている、その園児の馬の見方が現れているんじゃないかなと思うのです。そのプロセスを見るのがとても大切なのではないかなと思いました。そういうプロセスの重要性についてはあるグループのワークショップの中で出ていましたね。

すみません、時間がないのでこのあたりで。つまり、教師にとっては作品を見るだけでなく、プロセスを見るというのが非常に大切なことだと思います。では最後にひとつだけ。近藤先生からいただいた言葉で嬉しかったのは「英語が大切なのはわかるけれども、それで美術の授業が犠牲になってはいけない」という言葉です。どうもありがとうございました。またこういう機会を設けたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

山本：それでは長時間にわたりどうもありがとうございました。本日は寒いですのでお気を付けてお帰り下さい。